

研究論文

ダークツーリズムについての近年の諸論調

—ナチス強制収容所跡ツーリズムなどを例証に—

Theories on Dark Tourism in Recent Years: Significance of Death Camp Tourism

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学客員教授、名誉教授

キーワード：ダークツーリズム、ナチス強制収容所跡ツーリズム、ダッハウ

Key Words : dark tourism, death camp tourism, Dachau

Abstract :

This paper claims that the theory of ubiquity of dark tourism is valid based on a review of some major theoretical frameworks in the current field, referring to the Dachau death camps tourism as one example. This raises the proposition that nowadays there is the ultimate darkness of tourism in its impacts on the global environment.

I. はじめに

1. 本稿の課題と論述限定

ダークツーリズム (dark tourism) については、わが国でもすでにいくつかの研究があり、中には、それは“ポリフォニック・ツーリズム” (polyphonic tourism) としてとらえられる必要があるという見解もある (遠藤, 2019)。

本稿は、そうしたことも踏まえた上で、イギリス・グラスゴー、カレドニアン大学のフーパー (Hooper, G.) とレノン (Lennon, J. J.) 共編の 2017 年の著『ダークツーリズム—実際と解明—』(Hooper & Lennon (eds.), 2017) に収録の諸論考に依拠し、海外におけるダークツーリズムに関する近年の諸論調について、ドイツ・ダッハウ所在の旧ナチスの強制収容所 (Konzentrationslager: KZ: 以下本稿では原則として KZ という。英語では Death Camp ともいわれる) 跡ツーリズムなどを例証に、ダークツーリズムにかかわる理論的ならびに実際の諸問題についてレビューすることを課題とする。

ちなみに、この編書の出発点になっている、ダークツーリズムとは何かについての論述によると、ダークツーリズムという言葉は、1996 年のフォレー／レノン (Foley, M. & Lennon, J. J.) の論考に始まる。同論考によると、ダークツーリズムとは、人の死んだ所や大災害のあったような場所で、実際のままの姿ないしは見せ場的なものになっている所を提示したり、ツーリストなどが見学できるようにしている所 (the presentation and consumption (by visitors) of real and commodified death and disaster sites) を訪れるもの、と規定されている (Foley & Lennon, 1996b, cited in Light, 2017, p.121).

訳文は本稿筆者のもの、以下同様形式のものはすべて同様。

これに対し同じ 1996 年のシートン (Seaton, A.V.) の論考では、それに相当するものは、「死者を訪ねるツーリズム」 (thanatourism) とよばれ、それは、端的には、死者、なかんずく暴力による死者 (violent death) やその他の死者と実際のな形で、あるいは象徴的な形で出会える場所へ旅行することを全部的もしくは部分的な目的にするもの (travel to a location wholly or partially, motivated by the desire for actual or symbolic encounters with death, particularly but not exclusively, violent death) と規定されている (Seaton, 1996, cited in Light, 2017, p.121)。

この問題を対象にした 2017 年のライト (Light, D.) の論考によると、以上の 2 つの規定は、ダークツーリズムの源流をなすものであるが、前者のフォレー／レノンの説が、基本的には供給サイド (ツーリズム業者提供面) を予定したものであるのに対し、後者のシートンの説は、需要サイド (ツーリスト側面) 予定のものと位置づけられる (Light, 2017, p.121)。

この上でライトは、さらに近年では、これら両者よりもさらに広くとらえるものが登場している。それは例えば 2006 年のストーン (Stone, P.R., 2006) のもので、それによると「ダークツーリズムとは、死や受難 (suffering) の場所 (だけではなく (本稿筆者によるカッコ、特に断わりがない限り、以下同様))、気味悪い感じのする場所 (seemingly macabre) に関連したサイトに旅行するもの」と規定される。この場合のように、近年では一般的には、(例えば後述の“ダークツーリズム普遍性論”のように) ダークツーリズムの範囲は、拡大している、と述べている。

こうした動きを踏まえてライトは、今日では、ダークツーリズムとは何かについて、一言でいえば要するに、単に「明るい (light) ツーリズムと暗黙裡に対照をなすだけのもの」(implicit contrast)と規定する以外に方法はないとともに、他方ではこの場合、例えば“気味悪い”ということは、かなり個人的差異の強いもので、文化的なものである。つまり“個人的に相対的なもの”(relative)と提議している (Light, 2017, p.122)。

さらにダークツーリズムとは何かに関連して、ダークツーリズムの名称に戻って補言すると、すでに 1996 年、タンブリッジ／アシュワース (Tunbridge, J.E. & Ashworth, G.J., 1996) のように、“非調和的ヘリテイジツーリズム”(dissonant heritage tourism)とよんでいるものもある (Tunbridge & Ashworth, 2017, p.13. による)。

またその規定では、最近では、例えば 2009 年、シャープレー (Sharpley, R.) のように、簡潔に、「死 (death)、災害 (disaster) および破壊 (destruction) に関連した場所への旅行」と定義しているものもある (Sharpley, 2009, cited in Hodgkinson & Urquhart, 2017, p.40)。

もっとも理論的には、こうしたダークツーリズムについては、本来、非調和的なものであって、楽しく過ごすことを身上とするといったいいツーリズムと、こうしたダークな面との両立は、真の意味で可能であろうか。つまりもともと、ダークツーリズムというのは、根本的に異質なものを内包したものであって、果たして 1 つのものとして成立するであろうか。換言すれば、そうしたものは、本来、ツーリズム (なにかを観光) といえるものであろうか、といった難点が提起されてきた (Hooper, 2017, p.1)。

この点は、ダークツーリズムの成立性のいかにかわるものであり、フーパー／レノンの上記編著の両編者によると、ダークツーリズムのいわば本質にかかわる問題点である。ただしここでは、この点は指摘するにとどめ、次に、ダークツーリズムにかかわって、これまで論じられてきたいくつかの原理的問題点の概要について、主としてフーパー／レノン編著の「第 1 章序論」となっているフーパーの所説 (Hooper, 2017) に依拠し、まががき的に概述しておきたい。その内容は、結論を先にいえば、本稿筆者としては、ダークツーリズムには 3 つの問題領域があると、まとめられるものである。

2. ダークツーリズムの理論史的まがき：ダークツーリズムの 3 つの問題領域

ダークツーリズム論が生成したのは、上記のように概ね 1990 年代であるが、その後理論的にも確立したものになっている。この点について、2017 年にシャープレー／フリードリッヒ (Sharpley & Friedrich, 2017, p.134) も、「ダークツーリズムのアカデミックな研究は、(ダークツーリズムの前提となる) 事実提示より確かに遅れたが、今や (now) はっきり (well) と確立されたものになっている」と宣している。

この場合、さしあたり、理論的に中心的、というよりはいわば本質的な問題となってきたのは、上記で一言したダークツー

リズムの成立性のいかに、成立するとすれば、どのような立脚点に基づくのかという問題であった。

そこでフーパーも、ダークとツーリズムという、一見したところ非調和的な 2 つの用語 (two, seemingly incongruent, terms) を 1 つのものに合体させるには、どのような見地 (recalibration) が必要であったかを問い、この問題は、この合体により (合体される) それぞれの元の概念自体が否定される (cancelling) ような結果になるかもしれないものであったであろうと、改めて性格づけている (Hooper, 2017, p.1)。本稿筆者としては、ここに、ダークツーリズムの根本的問題の根源があると、思料される。

もっともフーパーはこの点について、ダークツーリズムが今日の姿のものとして存在するところ自体にすでに回答はあるとし、これが可能であったのは、主として次の 2 点に基づくものとしている。第 1 に、ツーリズムには例えばサステナビリティ的活動という要素などが加味されてきたことがあり、この点などからみるとダークツーリズムが加えられたことは、特段に奇異なことではない。つまり、もともとツーリズムの範囲は固定的と考えられる必要がないものであったということである。第 2 に、ツーリズムでは本来、宗教的信仰心に基づくスピリチュアルな (spiritual) ツーリズムが主流をなしてきたのであって、死者に対する追憶の念を本義とするダークツーリズムは、こうしたツーリズムの本来の精神に照応したものであったことである (Hooper, 2017, p.2)。

さらにこの場合フーパーは、「戦死者墓地や戦場跡、ジェノサイド地、自然災害受難地に集っている人たちは、本来は、以前には見られなかったところの、(通常のツーリストとは) 異なったタイプのツーリストで、それらの人々は、人間の邪悪行為 (malevolence) に対する弱さ (weakness) と、それに基づく非人間的行為、人間はそうしたことを行うことがあるであろう存在であること (human capacity) に関心を持つ人たちである」(Hooper, 2017, p.2) と規定されるものとしている。

ここには、ダークツーリズムのツーリストが、通常の、どちらかといえば快楽追求的とみなされるツーリストとは異なる存在という観点が提起されているが、この点は、さしあたり、以下本項で後述のフーパー自らの説と見解が異なるし、さらには、本稿次節で述べるタンブリッジ／アシュワース (Tunbridge & Ashworth, 2017) の「ダークツーリズム普遍性論」(ubiquity of dark tourism)とも趣旨が異なることが注目される。

さらにフーパーは、上記のように、ダークツーリズムではスピリチュアルツーリズムとの関連が注目されるものであることを指摘しているが、しかしこの点についてフーパーは、結論的には、そうしたスピリチュアルツーリズム本来のものは宗教的ツーリズムであって、ダークツーリズムは、それとは性格が異なるものと主張している (Hooper, 2017, p.7)。

つまりフーパーのいわんとするところは、以上においては、ダークツーリズムの本質、端的には現代的意義は、これまでのツーリズムにはなかったものを追求するところにあって、あくまで

も、人間が遭遇するかもしれない悲惨な残虐行為や災害結果に対する追憶の強化、そうしたことが二度とないように努める意識の高揚にあると規定されるものである。

これに対し、まず、フーパーによると、ダークツーリズムに関する理論史の中において、今1つ注目されるものに、上記で一言したシャープレー／ストーンの2009年の編著(Sharpley & Stone, 2009)がある。というのは、この著は、フーパーによると、歴史的事実の正確性(accurate)、すなわち野蛮性(barbarity)や精神的ショック性(trauma)の事実指摘、および起きた行為の異常性(morbidity)と悲痛性(grief)の告発に重点があるからである。ここでは、理論的には、ダークツーリズムの事実提示(practice)と理論的解釈(interpretation)の違いが指摘されている。これはダークツーリズム理論の二面性といえるものであるが、ダークツーリズム理論としては、事実の提示に留まるものと、ダークツーリズムのあるべき姿を提示する、一種の規範論的解明とがありうるということが提示されていると解される。

この上にとってダークツーリズム自体に戻って、そのあり方をみると、フーパーによっても、ダークツーリズムのツーリストの実際の現実の姿は、必ずしも上記のようなものではない。すなわち実際には、それは、いわゆるキッチュー性(kitschification)といった調子のものであることが多い(Hooper, 2017, p.3)。キッチュー性とは、人間には、本来、恐ろしいもの(fear)や、不安を起こすもの(anxiety)、わくわくさせるようなもの(fun)などを興味本位的に見てみたいとする欲求があり、ツーリズムでもそのようなものを見せることを身上とするものがあることである。

それは本来的には、フーパーによれば、ダークツーリズムのライトな側面を提示すること(a clearly identified light side of a dark tourism)に志向したものという特徴を持ち、実際には、ダークツーリズムにおいても不可欠的に付随するものである。これは、別言すれば、歴史的遺産などの商品化(commodification)をもたらす側面であるが、フーパーは、ダークツーリズムにもこうした側面があることを否定できない、というのである。

すなわちフーパーは、「ダークツーリズムの生成に関する論議では、人間の悲しみや受難(suffering)の事跡についてマーケティングする場合には慎重さが必要という考えがあったが、しかしこうしたニッチ的提供物(niche offering)には、實際上、(見世物的な)長い歴史がある」(Hooper, 2017, p.3)ことに注目されざるをえないとし、その上で、これまでの研究によると、いわゆるダークツーリズムのツーリストたちは、多くが、他の享楽志向的なものたちと全く同様な卑俗的な(vulgar)ものたちで、気配りがなく(tactless)、種々な刺激的なことや興奮させることに熱中するものであって、ツーリズムにより教訓や自己修養を得ようとするものなどは、ほとんどないと提示している(Hooper, 2017, p.3)。

以上におけるフーパーの、一見したところ多義的と思われる所説は、本稿冒頭で述べた諸点を参照して本稿筆者として整理すると、3つの問題領域に分かれると考えられる。

第1は、ダークツーリズムは普遍的なものか、特定の形態の

ものか、という問題である。これは、換言すれば、ダークツーリズムの起る根源を問うものであるが、本稿筆者としては、後述の人間の本能的動機の中には、人間として死者に共感を持ちたいとする心情があることに基くものと考ええる。

第2は、ダークツーリズムの実際のツーリストにかかわるもので、そうしたツーリストはどのようなものたちであるかというものである。つまり、そうしたツーリストたちはもともと特定の心情を持ったものたちであるのか、もしくは、通常のいわゆる快楽追求的ツーリストを主とするものたちかというものである。後者の場合には、そうしたツーリストたちに対しダークツーリズムはどのような作用を及ぼすものかが、理論的には問題となる。

第3に、ダークツーリズム理論にかかわるもので、ダークツーリズム理論は、ダーク的事実がどのようにになっているかのいわば説明に留まるものか、あるいは、そうしたダーク的事実を見たツーリストがどのような意識を持つべきかについて指導性規範性を発揮すべきものであるかどうかの問題である。

ダークツーリズムそのものにかかわる前2者の問題は、ここでは基本的には、ダークツーリズム(自体における)2つの二面性のテーゼとしてまとめられる。第3のものは、ダークツーリズム理論にかかわる二面性で、それには現実事実の提示と、その規範的宣明との二者があるものとしてまとめられる。

もっとも以上の3問題領域は、相互に関連し、重複するところがあつて、明確には区別し難いところがある。というのは、事実の提示と理論的解明とは相い照応し一体であることが多いからである。これは、本稿筆者のみるところ、結局、本質的には、人間が持つ本能的な心情の二側面、すなわち事実を知りたいとする心情と、人間として死者に共感を持ち、人間としてあるべき生き方をしたいとする心情との、矛盾的二面があるところに根源があると考えられるが、これがさしあたり、ダークツーリズムの供給面と需要面において多様に現出し、ダークツーリズム論の論議すべき多彩な問題となって生起する。その理論的言明には、事実の解明に重点をおくものと、規範的宣明に力点をおくものがあり、理論的にはさらに多様な様相をなす。

ただし以上はフーパーの所説に関連し、本稿筆者の立場をまえばき的に提示したものである。これは、以下における本稿論述の根本的立場になっているものではあるが、以下の論述では、当然ながら、それぞれの論者の主張点を前面に置き、本稿筆者主張点のさらなる展開は直接的な課題とはしていない。それは、例えば“ダークツーリズムの本義は何か”として、他日の課題としているものである。

本稿まえばきは以上とし、次に、ダークツーリズムの原理論を考察する。まず、タンブリッジ／アシュワースの論考「すべてのツーリズムはダークツーリズムか」(Tunbridge & Ashworth, 2017)に依拠し、ダークツーリズムの普遍性論テーゼを取り上げる。

II. ダークツーリズムの原理論

1. ダークツーリズム普遍性の理論

タンブリッジ／アシュワースは、同論考の冒頭において、われわれ（タンブリッジ／アシュワース）は、長い間、ツーリズムは、究極的には、個人的なもの（individual）であり、個人特有なもの（idiosyncratic）と考えてきた。故にエコツーリズムとか、ダークツーリズムなどと分けることには余り賛成ではなかった。われわれがいわゆる（研究上で）専門とするところは、一般にヘリテージツーリズムといわれるもので、こうした観点からすると、本来ツーリズムは、いわゆるダークツーリズムを含めて、すべてがヘリテージツーリズムと規定されるという考えを持ってきたと述べている（以下本節記述は Tunbridge & Ashworth, 2017, p.12ff. による）。そしてかれらは、これを“ダークツーリズムの普遍性”の主張とよんでいるが、それは、かれらのダークツーリズム論の出発点になるテーゼである。ここでは、こうした観点に限定してかれらの所論を考察する。

タンブリッジ／アシュワースによると、確かにダークツーリズムという論題は、本稿で既述のフォレー／レノン（Foley & Lennon, 1996a）、シートン（Seaton, 1996）、タンブリッジ／アシュワース（Tunbridge & Ashworth, 1996）に始まるが、これらの試みがダークツーリズムというツーリズム論形態として定着したのは、一般的には、2013年のハルトマン（Hartman, R., 2013）の論考によってであり、タンブリッジ／アシュワースのみるところ、それは、端的には、（東西対立の）いわゆる冷戦終了後の理論情勢（the post-Cold War intellectual environment）に由来する。すなわちそれは、すでに1990年代に生成してはいたが、冷戦時には、政治的圧力もあり、本格的に展開されることが少なかった。例えば、本稿で後述の“遅延されたダークツーリズム”となった根源はここにある。つまり、ダークツーリズムの高唱いかんは、政治事情のいかんにより左右される場合がある、というのである。

もっとも冷戦終了後についてみても、ダークツーリズムには増殖化傾向（proliferation）と浅薄化傾向（dilution）があり、需要側における認識の立ち遅れもあって、さしあたりダークツーリズムの声望はそれほど高いものとはならなかった。理論的に転機となったのは、タンブリッジ／アシュワースによると、2015年のアシュワース／イサークの論考（Ashworth & Isaac, 2015）である。

アシュワース／イサークの論考は、ダークツーリズム論としては、ツーリズムサイトの描写に重点をおくのではなく、ツーリストたちが持つところの、当該ツーリズムの“ダーク性の知覚”のいかん、すなわちその動機（motivation）、体験（experience）、感情（emotion）のいかんにより力点を置くべきことを提起したものである。つまり、同じサイトを訪れた人でも、印象が人により異なることが肝要と主張したのである。受ける印象では、例えばライト（light）というものから、ダーク（dark）というものまであるし、その持続期間（duration）も一様ではない。このことが肝心というのである。

これはその後、情感（affect）として示される場合もあるが、

こうした考え方によれば、ダークという感情は、基本的には（見る人の）個人的なものということになる。かくてダークネスという知覚が起きるのは、サイトのいかんではなくて、個人としての体験感や感情からであると規定されるものとなり、ダークネスの個人化（individualise）が主流的な考え方になった（Tunbridge & Ashworth, 2017, p.13）。

この考えにたつと、さらにそれぞれの個人では次のような現象が起きるものと措定される。すなわち、ダークなサイトの見学が続くと、ダークという感情の程度は逡減する傾向があることである。最初は強烈な印象を受けた人でも、サイト見学が続くと、あるいは多くのサイトを見学して回るうちに、最初の強烈さは徐々に低下し、遂には全くなくなることもある。さらにはその逆なもの、つまりライトなものに変わることもある。“潜在的ダークツーリズム状態”といっていいものであるが、“ダークツーリズム＝ライトなもの”という見解さえ生まれるゆえんである。

そこでタンブリッジ／アシュワースは、ダークツーリズムを含めて、「ツーリズム経験というものは、どのようなものでも、個人のいかんにより、しかも（ツーリズム体験をした）時のいかんにより、ダークとみられるものの程度が変わるものである」とし、結局、ダークツーリズムで問題となるものは、あくまでも、（個々のツーリストが持つ）ダークネス感のいかん、その影（shade）の長さ、強さ（intensity）、それが持続する時間（duration）の度合いなどがどれほどのものであるかということであり、要するに、「ツーリズムがダークネスを創り出すのであって、（ツーリズム対象物の）ダークネス性やその知覚が、ツーリズムを作り出したり、ツーリズムに影響を与えるのではない」（Tunbridge & Ashworth, 2017, p.14.）。つまり、ダークツーリズムは個人的主観的なものであると、提議している。

次に、本稿筆者として今1つのダークツーリズムの基本原則と考える“ヘリテージツーリズムの非調和性の理論”を考察する。ただしこれは、直接的にはダークツーリズムをヘリテージツーリズムとして規定するものである。

2. ヘリテージツーリズムにおける非調和性

ヘリテージツーリズムの非調和性は、タンブリッジ／アシュワース説の出発点たる今1つのテーゼである。この点についてかれらは、まず「全体としてみた場合、ヘリテージツーリズムをツーリズムの中で特別なものとして扱うことは、理論的に正解というものではない」（Tunbridge & Ashworth, 2017, p.14.）。すなわちツーリズムはすべて、ダークツーリズムにしても、要するに、なんらかのヘリテージを訪れるものであり、一般的にいえば、ツーリストで目的になるものは、どのようなものであれ、ヘリテージということがいえるとするが、しかしこの場合、ヘリテージといっても種々な形や意味があるものであることが肝要な点とする。

こうした違いが、すなわち、ヘリテージにおける非調和性（heritage dissonance）であり、それは、具体的には、当該ツーリズムにおけるヘリテージ性の重みの違いとして現れるものである

という。またこうした違いは、要するに経済的効用 (economic use) の違いとして現象することが多いものであるが、ところがこれは、タンブリッジ／アシュワースによると、実際には、ダークヘリテイジの程度の差異としてとらえられてきた傾向が強い。

以上のようにここでは、ヘリテイジの非調和性が提議されているが、この点に関するタンブリッジ／アシュワースの論説の中で注目されるべきものに、ヘリテイジの素材 (stuff) にかかわる問題について論じられているものがある。この点は、実は、タンブリッジ／アシュワースによると、既述で一言したアシュワース／イサーク (Ashworth & Isaac, 2015) によって、すでに次のように提起がなされているものである。

すなわちそうしたものには、ヘリテイジ性がはっきり目に見える形 (tangible) のものもあれば、そうではなく、当該素材の持つ意味 (meaning)、例えば、使用された具体的な仕方や形態、つまり状況を知って初めて、ヘリテイジ性がわかるものもあることである。例えば小さなハンマーのようなものでも、単に金槌として使われただけの場合と、人間を殴打する手段として用いられた場合とでは、意味が異なる。

この場合問題は、後者のような場合で、この場合には、素材がどのように使用されたかによって、すなわち展示の仕方、つまり空間的展開のいかんにより、観る人が受ける感情は大いに異なる。ダークツーリズムでは、このことが重大な意味を持つ。故にダークツーリズム・サイトでは、これらを整備し説明を付けて供覧に呈しているところに意義がある。つまり、空間的展開のいかん、すなわち、どのように提示され、見聞に供されているかによって、観る人の認識は異なるというのである (Tunbridge & Ashworth, 2017, p.15)。

以上は、ダークツーリズムの原理的テーゼというべきものであるが、それによると、ダークツーリズムでは、時間的経緯、空間的枠組み (展示の仕方など) および社会的取り組みのいかんが重要である。以下本稿では、この3点がどのように展開されているかを考察する。

まず最初に、時間的経緯の問題を取り上げる。ここで何よりも注目されることは、なにかずくその時々政治的事情によりダークツーリズムとして取り上げられる程度や内容が変わり、例えばそれが時期的に遅れることがありうることである。ここではそれを、さしあたり“遅延されたダークツーリズム” (dark tourism delayed) と規定し、タンブリッジ／アシュワースに依拠してその事態を考察する。

Ⅲ. ダークツーリズムの時間的問題: 遅延されたダークツーリズム: ジャージー島の場合

ジャージー島 (Jersey) は、イギリス海峡にある、ヨーロッパ大陸にごく近いイギリス領、チャンネル諸島のうち最も大きな島である (以下本項記述は Tunbridge & Ashworth, 2017, pp.17-19 による。また以下の論述はチャンネル諸島全体に妥当するところが多い)。同島を含むチャンネル諸島は、第二次世界大戦中にドイツ軍に占領されたも

ので、占領中の事跡がいくつもあり、ダークツーリズムの地とされているものである。ところが、同諸島は、この点をめぐって、ある意味で信じられないような極めて特異な経過をたどった。

大戦中あるいは終戦に際し、同諸島では、ドイツ軍に対するいくつかのレジスタンス的行為があった。主として非戦闘的なものではあったが、島民によりサボタージュ行為や受動的な非服従的行為 (passive civil disobedience) などがあり、いく人かのユダヤ人を含む、島民約 2,600 人がドイツ軍に捕えられ、22 人がドイツ軍による強制収容で亡くなっている。

ところが、次節で取り上げるカーの論考で詳述されているように、第二次世界大戦直後イギリスでは、「イギリスは戦争被害国ではなく、戦争勝利国である」ことを強調する“チャーチル・パラダイム” (Churchillian Paradigm) が高唱されたこともあって (Carr, 2017, p.99)、驚くべきことに、これらの対ドイツ軍抵抗行為は、「チャンネル諸島に関する (ドイツ軍とのトラブルを避け、島民の安全を確保するという) イギリス政府の方針に反する (contrary) ものであった」とされ、例えば終戦後でも「こうした占領中の行為についての調査に対して消極的な (reluctance) 雰囲気があった」といわれるものである (Tunbridge & Ashworth, 2017, p.18)。

このような次第に基いて、少なくとも 1980 年代までのところでは、例えばジャージー島などでは、戦争中の行為について、例えばドイツ軍侵攻に対する特段の抵抗行為はなく、同島駐屯中のイギリス軍も自らにおいて武装解除したものであり、ドイツ軍敗戦に際しても特段の解放闘争などはなかったと言われてきた。そしてそれにいわば照応して、その後におけるいわゆる東西冷戦終了に際しても特段の高揚行為はなかった (Tunbridge & Ashworth, 2017, p.18)、とされてきた。

それ故、もともと同地では、戦後においても「他のドイツ軍占領地域にくらべて極めて特異な状況にあった」 (Tunbridge & Ashworth, 2017, p.17)。例えば同諸島では、ドイツ軍占領当時の遺品 (physical scrap) は、1980 年代までは、“勝手に処分してもいいスクラップ” (disposal scrap) として扱われていた。一方、同諸島は、イギリス本土にくらべて比較的気候温暖な地で、夏季ビーチには海水浴を楽しむ観光客も多く、旧来的な“快適なツーリズム”の地として知られたものであった。

そうした中、ドイツ軍占領時代の事跡などが注目されることになったのは、ようやく 1990 年代になってからである。この点についてタンブリッジ／アシュワースは、「もしこうしたことにより、ダークと見られる様相がもともとなかった (not potentially dark enough) というならば、それは、イギリス政府が果たした直接的役割について配慮するもの以外の何物でもない。…戦後の赤十字などによる同諸島援助の様々な行為に対する記念物は、イギリス本国に対する声なき叱責 (silent rebuke) と考えられるものであろう」とし、さらに「ここには、少なくとも、当時のチャンネル諸島と (対戦国ドイツではなく、まさに) イギリス王国との間にあった悲しい出来事を示す (unhelpful in the at times fractious relationship between the Channel Islands and the UK) ヘリテイジが存

在する」(Tunbridge & Ashworth, 2017, p.19)と論じている。

この場合、対ドイツ軍との悲しい出来事が関心を浴びるようになったのは、上記のように1990年代で、タンブリッジ／アシュワースのいうように、ジャージー島では「公式的には忘れられていた50年後にようやく」(ドイツ軍占領からの)解放記念行事が行われ、同島は“記憶されるべき所”(memorialscape)になった。ジャージー島の中心都市というべきセント・ヘリアの港域の解放記念地域に象徴的な記念塔が建てられたのは、やっと1995年のことであった。ここには“遅延されたダークツーリズム”の典型例がみられる。

タンブリッジ／アシュワースによると、ここでの要点は、こうした結実をもたらしたものは、究極的には、公的なものやボランティア的なNGOなどの努力、すなわち(ダークツーリズムの)供給側の努力であった(Tunbridge & Ashworth, 2017, p.19)。つまり、供給側の努力がないと、こうしたものが作り出されたり、維持されることは困難であった、というのである。

それ故、タンブリッジ／アシュワースは、結論的には、ダークツーリズムは、供給側の取り組みのいかん、端的には、ツーリズム製品の多様化(diversification of the product line)のいかんにより決まるものとし、再度、「われわれは、ツーリズムが、多くの人にとって、かつ、多くの場合、光り輝くものであることに反対するものではない。われわれが主張せんとしていることは、そうしたツーリズムが、そのデザインのいかんや状況のいかんにより、つまり供給の仕方のいかんによって、どのような人にとっても、どのような時においても、ダークツーリズムになりうるということである」(Tunbridge & Ashworth, 2017, p.23)と提議し、ダークツーリズムは、本質的には、“ヘリテイジの非調和性”にあるとした上で、次の点を補足し強調している。

これは、すでにビラン／ポリア(Biran, A. & Poria, Y., 2012)ならびにハルトマン(Hartman, 2013)により提起されているものであるが、「(今日における)ツーリズムの究極的なダーク性(the ultimate darkness of tourism)は、グローバルな環境に対するインパクトにある。今や人間の移動・足跡はエベレスト山頂から南・北極まで及んでおり、人間歴史上にはないものになっていることを考えても、ツーリズムは、エコツーリズム等を含めて、このことによるダーク性をさらに深く考えるべきものになっている」(Tunbridge & Ashworth, 2017, p.23)と述べ、終りの言葉としている。まことに聞くべき言葉と考える。

次に、ケンブリッジ大学のカーの論考(Carr, 2017)を取り上げる。同論考は(ダークツーリズムの起因をなす)“ダークな出来事”(dark event: 以下本稿では単にイベントという場合もある)のあった場所は、その後“ダークレガシー”(dark legacy: 以下本稿では単にレガシーという場合もある)になり、さらに条件のいかんによっては“ダークヘリテイジ”(dark heritage: 以下本稿では単にヘリテイジという場合もある)になって、なんらかの形でダークツーリズムの目的地(destination)になることを提示しているものである。ダークツーリズムの時間的変化等に基づく空間的展開の基本的枠組みを

まとめ的に提示したものといえる。その際、前述のジャージー島を中心にしたチャンネル諸島の場合が実際の基盤とされている。

IV. ダークツーリズム展開の基本的枠組み：イベント・レガシー・ヘリテイジツーリズム

カーは、同論考の目指すところについて、冒頭において「そもそもダークネスというものはどのようにして起きるのか、を解明せんとするものである。その場合、こうしたレガシーのダーク性は固定的なものではない(not fixed)。そしてそれは、サイトそれ自体から生まれるものではないし、ましてや当該サイトの意味や歴史を知り理解している人々(people)から生まれるものではない。そうではなくて、それを見る人々(beholder)の頭の中で起きるものである。故にそれは、例えば当該サイト近辺の住民(locals)と訪問客(visitors)とでは異なるものであり、要するに文化的に(culturally)決まるものである」と述べている(以下本節記述はCarr, 2017, p.96ff.による)。これが、カーの所論の出発点をなすテーゼである。その上で、このテーゼは、具体的には図1のような様式で示されるとしている。

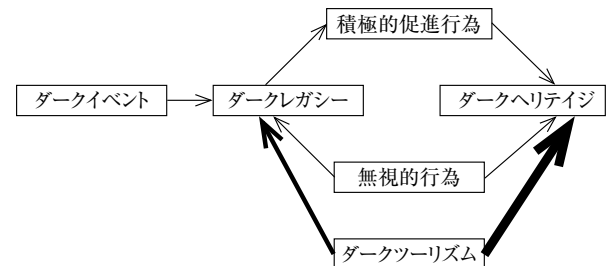


図1：ダークツーリズム展開の概念図(出所：Carr, 2017, p.98)

ダークイベント、例えば他国軍による占領などがあると、その場所では、有形の物や、人々の記憶といった無形物でダーク性が残る。これがダークレガシーである。ただしそれは、無条件にダークヘリテイジになるのではない。例えば有形物でも、それを後世に残すよう人々が努力するものもあれば、そうしたことがされない場合もある。前者の後世に残すような努力がなされると、それはダークヘリテイジになる。しかしそうした努力がなされないと、それはダークヘリテイジにはならない。

つまり「ヘリテイジは(有形物にしる無形物にしる)少なくともなんらかの人々のある面におけるアイデンティティを代表するものとして、価値あるものとして選択されたものである」(Carr, 2017, p.97)と定義される(「遺産=選択されたもの」については大橋, 2010, 87頁以下参照)。

ただし、既述のジャージー島のように、そうしたヘリテイジ化行為が遅れることはありうる。また、ヘリテイジとして認められるものになってからも、ヘリテイジたることに対し積極的促進的行為(active intervention)がないと(つまり、無視的行為(neglect)が続くと)、ヘリテイジ性はなくなり、元のレガシー状態に戻ることも

ある。すなわち「レガシーとヘリテイジとの関係は、循環的な (cyclical) ものであって、直線的なものではない (not linear)」(Carr, 2017, p.98)。

この場合サイトに対する接し方は、レガシーの場合もヘリテイジの場合も、サイト地域住民と訪問者では異なることが多い。訪問者では、レガシーたる所を訪れるよりも、ヘリテイジとなっている所を訪れる志向性が強い(図1ではダークツーリズムのレガシーの場合(ゴシック細線)とヘリテイジの場合(ゴシック太線)とが区別されている)。例えばジャージー島の場合でも、ツーリストは記念施設などとして整備され、特別保存されている所の見学に志向する度合いが高い。しかし住民では、イベントのあった所そのもの、つまりレガシーたる所を訪れるものが多い。

ただしこの場合、カーによると、少なくともジャージー島の場合には、いわゆるイベントがあった場所(例えばバンカー(bunker: 掩蔽壕)も、そのままの姿では、一般のツーリストとは異なって、住民では多くの場合、慣れ親しんだ所として、ダークな場所とはなっていない。すなわち、ツーリストとは、文化が異なるのである。カーは、「ダークネスが感じられるのはどこかという点だけではなく、ある場所についてダークネスを感じるのどのような人かについても、歴史的事実を知っているかどうかであるよりも、どのような文化的アイデンティティのもとにあるかによって決まる」(Carr, 2017, p.98)と宣している。

その上でカーは、ジャージー島などチャンネル諸島の場合、島民たちは、第二次世界大戦において、他のドイツ軍占領地域の人たちと同様な経験をしたにもかかわらず、「島民たちの戦争についての思い出(narrative)は、他のヨーロッパ被占領地域の人たちのそれとは、かなり異なる」とし、島民たちは、この戦争について、ドイツ軍の犠牲者というよりも、勝利したイギリス人という意識の方が強い。それは何よりも戦勝国という見地にたつもので、チャーチル的な考え方、すなわちチャーチル・パラダイムに立脚するものである、と論評している(Carr, 2017, p.98)。

チャーチル・パラダイムとは、既述で一言したように、「イギリスは勝利した国(victors)であって、犠牲となった国(victims)ではない」というもので、ドイツ軍の占領などにおける犠牲よりも、(そうした犠牲にも敵にも打ち勝った)勝利を高揚するものであった。すなわちそれによると、例えばジャージー島などにおけるドイツ軍占領時代の苦々しい事跡も、こうしたことを強制したドイツに打ち勝ったことを証する場所として受け止められるものとなる。これを、ベル(Bell, D., 2003)は統治上の神話(governing myth)とよんでいるが(cited in Carr, 2017, p.99)、カーによれば、それは要するに、人々の記憶をコントロールし、国家主義的神話(nationalist myths)を喚起するものである。

ジャージー島などでは、その後それが変化し、ドイツ軍・ナチスの残虐性を示すものに重点をおくよう修正が行われているが、カーのみるところ、少なくともジャージー島などでは、こうしたチャーチル・パラダイムに立脚した統治上の神話を信奉する

ものが、依然として住民には多い。しかしツーリストには少ない。

そこでカーは、ツーリストでは、「住民で感じていない所で、ダークネスを感じるものが多い」(Carr, 2017, p.100)と締めくくり、最後に重ねて、ある場所のダーク性は固定的なものではない。それは、人のいかににより異なる文化的なものであって、「それを見たり感じることを望まない人たちにおいては、否定されたり、破壊されたり、無視されたりすることがある」(Carr, 2017, p.106)と述べている。

そこで、カーの所説は以上とし、次に、ダークツーリズムの社会的取り組みいかなの問題として、ドイツ所在の旧ナチス・ホロコースト強制収容所(KZ)跡について、旧西ドイツ国(Bundesrepublik Deutschland: BRD)の場合と旧東ドイツ国(Deutsche Demokratische Republik: DDR)の場合とを比較的に考察する。ただし本稿では、前者、すなわち旧西ドイツ国所在のものでは問題が多いと考えられるが故に、論述はやや長く、詳しいものになっている。かつ最初に、アシュワース／タンブリッジの論考(Ashworth & Tunbridge, 2017)についてこうしたツーリズムの意義についてレビューする。同論考のタイトルは「死のキャンブツーリズム—解明と管理」である。ちなみに同論考では、「死のキャンブ」は「ホロコースト・ヘリテイジ」(Holocaust heritage)とも表記されている(Ashworth & Tunbridge, 2017, p.69)。

V. ホロコーストサイト・ツーリズムについて

1. 問題の提起

アシュワース／タンブリッジは、同論考冒頭部分において、この問題解明のためにはまず3つの命題が前提になるとする。第1にそれは、非調和的ツーリズムというものである。その大要は既述している。第2にそれは、これまで人間に対し向けられたすべての暴力的行為(violence)の中でも特異な、強烈な感情(strong emotion)から起きたもので、それは人間行為の中でもとりわけ注目され記憶されるべきものである、ということである。

第3にそれは、残虐行為(atrocity)のヘリテイジとしても暴力が実に大規模で、かつ意識的に実行されたものであって、記憶が常に強烈なものである。中でもジェノサイド・ヘリテイジ(the heritage of genocide)では、(基本的にはユダヤ人という)ある特定集団のもの全員が犠牲の対象になったものであり、これに対し他の集団のものは実際的あるいは(傍観者の態度であったという意味で)ポテンシャルな暴力執行者であったと認識されざるをえないものであるが、ユダヤ人に対するジェノサイドについていえば、「単なる傍観者(bystanders / spectators)すらも、何もしなかったことを恥じるとき、あるいは歴史的悲惨な体験を知ったと自覚するときには、そのダーク性の規模とショック性の強さに驚愕するのである。そしてユダヤ人ジェノサイドでは、これらのことすべてが強力に実行されたものである」(Ashworth & Tunbridge, 2017, p.70)と述べている。そこでアシュワース／タンブ

リッジは、改めて「このような暴力的な人間性に反する行為が、いかになされたのか、何故それは忘れてはならないものかが、問われねばならない」(Ashworth & Tunbridge, 2017, p.71)と力説する。

ただしダークツーリズムとして考える場合には、ツーリズム参加者にはもともと多様な考えの人がいることが充分考慮されなくてはならないという。すなわち「ダークネスとはどのようなものか、ツーリズム参加者の個々の(これまでの)経験や感覚、従って当該ツーリズム参加の動機のいかんにより異なるものである。故にダークツーリズム参加者が当該サイトを経験して感じるものも一様ではない。その感覚はダークという人もあれば、ライトという人もあるであろうし、その中間という人もあるであろう。これが、ダークツーリズムの大きな難点(difficulty)なのである」。

しかも(ダークツーリズム参加者の中でも少なくとも)通常の多くの者は、いわゆるカジュアルなツーリストで、ダークツーリズム以外の種々な通常のツーリズムと組み合わせで旅行し、その中でダークツーリズム・サイトを訪れる者である。しかしこうした通常のツーリストも、こうしたホロコーストサイトを訪れて、戦慄すべきものに対しなんらかの強い関心を持ち、共感性(empathy)を持つものとなるものであることが見失われてはならない、と強調する(Ashworth & Tunbridge, 2017, p.73)。この点に少なくとも、ホロコーストサイト・ツーリズムの意義はあるというのである。次にこの点をさらに考察する。

2. ホロコーストサイト・ツーリズムの動機

この動機の問題は、こうしたサイトを訪れるツーリストの場合と、サイトの設置者・運営者の場合とに分かれる。

まず、前者の場合をみると、アシュワース／タンブリッジは、「通常ではない事跡(the unusual)は人々を引き付け、人々はそれにとらえられる。例えばスペクタクルな自然現象、壮大な建築物やイベントなども同様で、それらは通常のものではないが故に、人々の関心を集める。これは残虐的行為についてもいえるのであって、それが通常のものでないが故に、人々の関心を集める。通常ではないものを見学したりするのは、現在における教訓として普遍的な変わることのない性向(universal insatiable appetite)である」(Ashworth & Tunbridge, 2017, p.73)と書いている。

これは、この項目についてのアシュワース／タンブリッジの出発点たるテーゼであるが、本稿筆者としては、自然の雄大な風景や大災害などと、ナチスによるホロコースト残虐行為を共に、単に通常ではないものとして同列に論じるのは、適切ではないと考える。というのは、もしナチスの行為をこのようなものとしてとらえるならば、それは一種の自然的過程、少なくとも自然的過程と同質のものにとらえられることになり、ナチスの存在を含めてナチスの行った事柄が、やむをえないものととらえられる危険があるからである。ナチスの存在そのものの、なかんずくその残虐行為は、いわゆる人災であって、雄大な風景や自然災害などと同列に論じられるのではないと考える。

しかしアシュワース／タンブリッジの論説では、全体としては、適切な見解が提示されているものと考えられる。というのは、それは次のような見解の上にたつからである。すなわちそれは、まずツーリストの動機として、上記のように、共感性が挙げられていることに基礎をおいているが、それは「こうしたツーリストが自己自身を、記憶されるべき残虐行為の犠牲者と同じような状況におくこと(identify)」(Ashworth & Tunbridge, 2017, p.74)と規定されるものであり、そこではそうしたサイトへのツーリストたちが、ナチスの残虐行為犠牲者たちと一体となる共感性を持ち、そうしたことが二度と起こらないようにする教訓を得るものと規定されている(Ashworth & Tunbridge, 2017, p.75)。ここには、こうしたサイトへのツーリズムの現在における意義が正しく提起されていると考えられる。

すなわちここでは、もともとは単に関心があるだけのものでも共感性を持つものに転化すること、つまり関心性は共感性と一体のもの、あるいは共感性に転化する前段階のものであると措定されている。すなわち、アシュワース／タンブリッジでは、ツーリストの中には種々な人がいるが、こうしたツーリズムでは、参加したすべての人において、ツーリズムへの参加により、なんらかの形で人間の行いという重大な反人間的行為に対して、現在必要な教訓を得る重要な契機となるものであることが示されている。これには、供給側の努力があることが前提であるが、総合的にみてこうしたツーリズムに対する必須な見解として大いに聞くべきものであると考える。

そこで設置者・運営者(公的機関を含む)の動機についてみると、アシュワース／タンブリッジによると、一般的には次の4者が挙げられる。①歴史的保存(preservation)、②共感性の喚起(evocation)、③グループ・アイデンティティの強化(fostering group identity)、④より良き未来の形成(shaping of better futures)である。要するにその動機は、一言でいえば、犠牲者とツーリストとの共感性の促進、すなわち「ツーリストたちが自らを犠牲者の立場に置き、共感性を持つようにすることである」(Ashworth & Tunbridge, 2017, p.75)。

論考最後の結語においてアシュワース／タンブリッジは、一方では、ホロコーストサイト・ツーリストについて「それらのものがどのようなものかは、定義することが容易ではない」とし、それらのものは、そうしたサイトにある限り、単なる標準的なツーリズム経験を求めるような均一的なツーリストであるとは決していえないとしている。

その上で他方において、設置者・運営者の目的については、それはツーリストのそれとは異なっており、時にはツーリストのそれと矛盾していることもある。そうした設置者・運営者の動機となっているものは、典型的には、フィランソピー(philanthropy: 博愛主義)、利他主義(altruism)、人道主義(humanitarianism)であると宣している。

その場合、もとより設置者・運営者では多くが、確かに来訪ツーリストの多くあることによって自分たちの努力が証されたと

考えているものたちではあるが、しかしこうしたサイトを保持することの意義は多面的であって、ツーリストの受け容れは、その一部に過ぎないものであることは、これを正しく理解しておくことが肝要であるとしている。

ただしその場合でも、アシュワース／タンブリッジとしては、「そうしたサイトの保存・運営の目的が、多くの訪問者のあることによって達成されることは否定できないことを考えると、これらのサイトには、ますます多くのツーリストが訪れ、サイトとしての設置の趣旨が広まることが強く望まれる」(Ashworth & Tunbridge, 2017, pp.80-81)と述べ、終りの言葉としている。

アシュワース／タンブリッジの所論は以上とし、次に旧東西両ドイツにおける社会的取り組み方(従って空間的枠組み問題を含め)のいかなの問題として、まず旧西ドイツ国、ミュンヘン郊外、ダッハウ(Dachau)のナチス KZ 跡の運営の仕方に論点をおいているレノンとウェーバー(Weber, D.)の論考を考察する。同論考のタイトルは「長い影—ダッハウのマーケティング」(Lennon & Weber, 2017)で、結論を先にいえば、タイトルからもわかるように、KZ 跡のいわゆる“活用”の1つの仕方をめぐって論じられているものである。なおダッハウは、ミュンヘンの北西約 18 キロ、ミュンヘンより S バーン電車(日本の JR 電車相当のもの)で約 15 分である。

VI. マーケティング手段としてのナチス KZ 跡：ダッハウの場合

1. 問題の概要

ダッハウ KZ が開設されたのは、1933 年 3 月 22 日で、第一次世界大戦当時に作られた軍需品工場跡の敷地を利用したものであった。これは、同(1933)年 1 月 30 日のヒトラーのドイツ国首相就任、すなわちナチス(党)の政権掌握の僅か 2 か月後のことであった。

周知のように、ナチス(党)は、もともとユダヤ人排撃を党是とするものであったが、この政権獲得過程すなわち選挙戦では、直接的には反ナチス勢力のいわゆるワイマール体制派、つまり社会民主党(SPD)派、なかんずく共産党(KPD)と激烈な、時には武力衝突に及ぶ闘争を演じた。ナチス(党)では、そのための組織、すなわち突撃隊(Sturmabteilung: SA)が組織されるほどのものであったが、ナチス(党)では、時来たりせば、こうした(ユダヤ人を含む)反ナチス勢力を武力で強制的に社会的に排除するという考えを密かに持ち、準備していた。その計画は、すでに 1933 年 2 月 27 日(ナチスによるでっち上げといわれる)いわゆる国会議事堂放火事件の夜、その容疑者逮捕という名目で、早速実行された。

ダッハウ KZ は、ナチス KZ の最初のもので、その後作られたいくつかの KZ のモデル的なものとして、センター的地位にあるものとして機能した。同 KZ には、収容後他に移送されたものも含め、収容された人は(延べで)約 20 万人、同 KZ で亡くなった人は約 4 万 1 千 5 百人といわれる(本節記述は主として

Lennon & Weber, 2017, p.26ff. による)。

同 KZ 跡は、1990 年の東西ドイツ統一まで、西ドイツ側にあったこともあって、こうした KZ 跡の中でも訪問者が多く、レノン／ウェーバーによると、「最近(2017 年)でもダッハウ KZ 跡は、最も訪問者の多いものの 1 つで、1 年に 80 万人以上の訪問者があると推定される」(Lennon & Weber, 2017, pp.26-27)。

そうしたこともあり、レノン／ウェーバーによると、同 KZ 跡に関連して、多くはツーリストであるそうした訪問者に対し、ダッハウ当局では、「ダッハウは、KZ 跡だけがある所ではなく、(オールドタウンや古城など)他の多くのツーリズムポイントがあることを宣伝することに躍起になっている」(Lennon & Weber, 2017, p.27)という状態にある。

もっともこうした KZ 跡のいわゆる活用の問題は、理論上でも比較的早くから取り上げられ、すでに 1993 年にロジェク(Rojek, C.)は、これを“ブラックスポット”(black spot)とよび、“サイトの商業的発展”(commercial development)に志向したものと特徴づけているが(Rojek, 1993, cited in Lennon & Weber, 2017, p.27)、レノン／ウェーバーは、「こうした残虐行為のあった場所が、教育上(かつ、もしくは)ツーリズム上における目的地(educational and / or tourist site)になるとときには、(こうしたサイトを)どのように位置づけるか(interpretation)について複雑性(complexity)と必要性(demand)が高いものになる」(Lennon & Weber, 2017, p.27)と論じている。ここにレノン／ウェーバーの問題意識はある。

この点について、例えばビーチ(Beech, J., 2000)のように、東西ドイツ分立の時代、東ドイツ側にあって、平和運動などにおいてもいわば模範的な保存・活用状態にあるといわれた(ワイマール郊外の)ブーヘンワルト(Buchenwald) KZ 跡でも、レストランやみやげ物店があって、パンフレットや絵葉書など販売されていた。つまりこうした所では、訪問者サービス上不可欠なものと、人々の関心を事業的に利用していたものとがあり、両者の区別は、所詮、困難と論じているものもある(cited in Lennon & Weber, 2017, p.28)。

ダッハウの場合をみると、レノン／フォレーに依拠してレノン／ウェーバーが紹介しているところによると(Lennon & Weber, 2017, p.28)、同 KZ 跡の入口には「ダッハウを見てみよう。1,200 年の歴史を持つ古くからの芸術の都市で、古い城があり、由緒ある公園がある」(Visit Dachau, the 1200 year old artists' centre with its castle and surrounding park)という掲示板が掲げられ、その上そこには英語とドイツ語の大文字で「恥じることはありません」(HAVE YOU NO SHAME)と添書されていたといわれる(cited in Lennon & Weber, 2017, p.28)。

2. ダッハウ KZ 跡の経緯

実は、ダッハウ KZ は、1945 年 4 月の解放後、しばらくは旧ドイツ軍幹部やナチス幹部などの留置所として使用され、いわゆる下級戦犯の戦犯裁判所(ダッハウ裁判所)がおかれていた。ところがその後東西冷戦期になって、西側、特にアメリカの西

ドイツに対する態度に変化が起きた。これに応じてダッハウ裁判は終了となり、生存していた戦犯容疑者たちも1945年6月以降順次釈放された。

他方において、当時、東欧諸国に在住していたドイツ人たちが難民としてドイツに引き揚げることが本格的に始まり、旧ドイツ軍やナチス関係者と入れ替わるように、ダッハウ KZ 跡は1948年以降そうした難民の収容施設として使用された。されば、なかんずくこの時期を契機に、「ダッハウ所管のバイエルン州政府は、KZ 跡施設について、これを保存して教育上あるいは記憶上必要なものと考えことは止めて、その施設の多くは、近辺住民たちの必要に役立てられるべきものという方針を採った」(Lennon & Weber, 2017, p.29)。

この点についてレノン／ウェーバーは、すでに2005年にディステル (Distel, B. et al., 2005) が次のように述べているところを引用し、紹介している (cited in Lennon & Weber, 2017, p.29)。すなわちディステルによると、「この時期以降、ダッハウでは、1933～1945年にあった出来事、すなわちダッハウを中心にしたこの地域でおきた旧ナチスの残虐行為による犠牲者のことなどに対しては、本質的に (essentially)、なんの関心も示さないものになった」。

さらに、ディステルは、驚くべきことに、バイエルン州議会のダッハウ選出議員の中には、ドイツ人難民のためにも、(旧 KZ の絶滅性の象徴というべき) 火葬場施設 (crematorium) は撤去されたいと発言するものさえあったことを紹介している。しかし、これにはさすがに反対する声が多く、ドイツ人難民用施設問題は、別の形で処理されることになって、結局、1964年に難民用施設は移転され、KZ 跡として維持された (Lennon & Weber, 2017, p.29)。

このように、一言でいえば、この KZ 跡は、少なくとも当時は、近辺住民にとって、あくまでも何か有用なものに使用できる、便利な場所という意味のものとして位置づけられるものであった。すなわちレノン／ウェーバーによると、ダッハウにおいて、旧 KZ の痛ましいレガシーを堅持し、記憶されるべき惨禍の地として維持する特段の動きが始まったのは、ようやく1990年代後半ごろにおいてであったのである (Lennon & Weber, 2017, p.30)。

この時期になって初めて、いわゆるダッハウ KZ 跡のレガシー構築がなされ、ダッハウはそれを目当てに多くの観光客が訪れる所になった。ここにも“遅延されたダークツーリズム”の典型例がある。ところが既述のように、この場合でも、少なくともダッハウ市全体からみると、それらの来訪者の多くは、KZ 跡だけを訪れ、帰ってしまうものたちで、ダッハウの商店やホテルなどにとっては、単なる通過客というものでしかなかった、という問題があった。

そこで、レノン／ウェーバーは、例えば「ダッハウ KZ メモリアルサイトにしても、今後どのようなものになるか。すなわち次の段階はどのようなものになるかは、極めて難しい問題である」(Lennon & Weber, 2017, p.30)と評している。この場合、さしあたりダッ

ハウ市としては、次の3点が問題になるものであった。

3. ダッハウ市としての問題点

その第1は、ダッハウ KZ 跡では、何よりも、“ダッハウ市”という名称と“ダッハウ KZ 跡”という名称が、(ダッハウとして) 同一のものになっており、両者の区別が付き難いものになっていることである (他の KZ 跡の場合については後述)。両者は、善かれ悪しかれ、一体化され易い。それ故次のような現象がおきる。

これが第2点である。それは KZ 跡以外のダッハウ市の本来の独自性が表面に出にくいことである。ダッハウは古城があるなどツーリズム上でも誘引力があるにもかかわらず、それが消えてしまうのである。このことは、ひとつには、ダッハウがミュンヘンのごく近くにあることによって、さらに増進されたものになる。これが第3点である。

この点を見ると、ダッハウをとにかく訪れる者では、その実に多くがミュンヘンに宿泊する。すなわちミュンヘンを主たる訪問地として、その傍ら、いわば空いた時間に、ダッハウに来るにすぎない。ダッハウ KZ 跡訪問者も多くが、ダッハウ自体を主たる訪問地としている者たちではない。ダッハウのツーリズム機関が1990年代に行った調査結果によると、ダッハウ来訪者でダッハウを宿泊地としていた者は、僅か1割程度で (Lennon & Weber, 2017, p.31)、圧倒的多くがミュンヘンを宿泊地としているものたちであった。

次に、ダッハウ市そのものについて、一般にどのような認識が持たれているかについてみると、例えばレノン／ウェーバーの挙げているところによると、2007年の調査では、KZ 跡以外にダッハウの歴史上、あるいはツーリズム上で何か誘因物があるかという問いに対し、KZ 跡訪問者のうちで、ダッハウにはそうしたものがある、もしくはあることを知っていると答えたのは、僅か8%だけであった (Lennon & Weber, 2017, p.31)。すなわちダッハウは、KZ 跡があることのみが知られ、ダッハウ市の独自性はほとんど認識されていない。

しかし、レノン／ウェーバーのみるところ、ダッハウでは、仮りに KZ 跡がないということになると、どうなるか。「それ以外に観光客誘因物があるかといえば、少なくとも現在のところ、その可能性はかなり小さいといわざるをえない」(Lennon & Weber, 2017, p.32) 状況にあり、こうした点からみると、ダッハウは1つのディレンマに陥った状況にある。

そこで、ダッハウにおける KZ 跡ツーリズムはどのような位置づけになるかをみると、まず、ダッハウを訪れる観光客でも、ドイツ人とドイツ人以外の者 (以下本節では外国人という) とでは、一般的にみて、ダッハウの訪問目的が異なることが注目される。これまで行われた種々な調査に基づいてレノン／ウェーバーが述べているところによると (Lennon & Weber, 2017, p.34ff)、例えばダッハウ訪問において、KZ 跡のみを訪れる者は、(ダッハウ訪問観光客中において) 外国人観光客ではほぼ85%に及ぶが、ド

イツ人ツーリストでは15%ほどで、ドイツ人ツーリストでは、KZ跡以外の、ダッハウ市内ツーリズムを主目的にするものが多い。ただし注目されることは、ドイツ人でも教育上の主旨などでKZ跡を訪れるというものが相対的には多いことである。それは、統計上では、(ダッハウ訪問ドイツ人ツーリスト中の)15%ほどあるという結果になっている。

つまり、一般のドイツ人ツーリストでは、多くがダッハウに来た一部としてKZ跡を訪れるものである。これに対し、外国人ツーリストでは、ダッハウ来訪は、KZ跡訪問のみというものが多い。ダッハウ市当局としては、外国人を含む多くのツーリストが、ダッハウに来て、KZ跡のみを訪ねて去る人が多いのは、まことに残念ということになる(Lennon & Weber, 2017, p.36)。

ただし以上の上になってレノン／ウェーバーは、総括的には、ダッハウの場合、KZ跡をめぐって種々な考えや方策が採られてきたが、しかし「KZ跡が依然として重要なアピール性(significance appeal)を持ち、衰退の徴候などは決してないことは刮目すべきことである」と指摘し、「KZ跡ツアーについてさらに商品化が進められることがあったとしても、サイト訪問は、どのような形のもので、ツーリズム経験の中核部分として長く続くものである」(Lennon & Weber, 2017, p.37)ことを強調し、結語としている。これは、本稿筆者としても聞くべき言葉と考える。

次に、以上のようなダッハウの場合に対し、当時の東ドイツ国(DDR)では、どのような状況にあったかを、ごく簡単に考察する。

Ⅶ. 旧東ドイツ国におけるKZ跡の社会的取り組み

もともとドイツに所在する主たるナチスKZ跡としては、3大強制収容所として、「ダッハウKZ」以外に、ワイマール近郊にある「ブーヘンワルトKZ」(KZとして1937年設置)と、ベルリン郊外オラニエンブルクにある「ザクセンハウゼン(Sachsenhausen)KZ」(KZとして1936年設置。オラニエンブルクまでベルリン中心部よりSバーン電車で約30分)とがあった。これら以外に、主として婦人収容所としてフルステンベルク近くのラーヘンスブリュックに「ラーヘンスブリュック(Ravensbrück)KZ」(KZとして1939年設置。最寄り駅のフルステンベルク(ハーヴェル)までベルリン中心部より列車で約1時間)があった。ブーヘンワルト、ザクセンハウゼン、ラーヘンスブリュックはいずれも、東西ドイツ分立時代には東ドイツ国地域に所在のもので、この点において西ドイツ所在のダッハウとは歴史的事情が異なる。

すなわち、これらの東ドイツ所在の3KZ跡は、旧東ドイツ国では、種々な(国家指定の)「記憶遺跡」(Gedenkstätte)の中でも、(これら3KZ跡のみが)特別(特級)扱いのものとして、「国民的遺訓記憶遺跡」(Nationale Mahn- und Gedenkstätte)として指定され(Bartel, 1974, S.10)、人々の訪問すべき場所として推奨されていた。

中でも、ブーヘンワルトKZで注目されることは、1943年中葉のころから所内で、収容されていたフランス陸軍大佐、マン

ブ(Fredric-Henri, Manbes)を中心にレジスタンス的組織ができていたことである(同様な抵抗組織はザクセンハウゼンKZなどでもできたといわれる)。このことに関連してか、同ブーヘンワルトKZに収監されていた、当時(ワイマール時代)のドイツ共産党の最高指導者であったテールマン(Ernst Thälmann)は、同所内で1944年8月18日にナチス親衛隊員(SS)により射殺されている。こうした犠牲もあったが、特筆すべきことに、同KZでは、(1945年5月8日のドイツ軍降伏・終戦確定以前の)1945年4月11日連合国軍の到着以前に、すでに、こうした人々を中心にした抵抗行為により、実質的にすでに解放されていた(Institut für Denkmalpflege in der DDR, 1974, S.351-352)。

上記のドイツ所在のKZ跡の中でも、ブーヘンワルトKZ跡は、既述のように、こうしたKZ跡保存運動、というよりは現代の平和運動の原点になるべき象徴的なものとして国際的にも広く知られてきた。当時の東ドイツ国のこうした記憶遺跡保存運動の最高責任者であったバルテル(Walter Bartel)は、1974年刊行の同国記憶遺跡の総括資料全書の序文において、当時、ブーヘンワルトKZ跡には一日平均約1,000人の訪問客があったと書いている(Bartel, 1974, S.10)。

本稿筆者としては、(ドイツ所在のものに限定しても)これら旧東ドイツ国に所在のものの保存のあり方をみると、社会主義的体制のもとにあったかどうかなどとは無関係に、ここには現代の人間として採るべき道が示されている。ダークツーリズムという枠組みで考えても、現代におけるダークツーリズムのあるべき姿が示されていると考える。

以上の終りにあたり、ダークツーリズムの現代的な社会的取り組みの意義について、カーディフ大学のダンクレー(Dunkley, Ria)が次のように提議しているところを紹介しておきたい。すなわちダンクレーは、これにより、例えばヘリテージ訪問者を軸として、ダーク性について社会的に再教育(re-education)が進み、「ツーリズムによって平和を」(peace through tourism)というスローガンが促進されることになると主張している。

そして、ダークツーリズム・サイトを保存し見学を進める動きは、近年になって特段に高まっており、例えば西欧地域で見ると、近年こうしたメモリアル施設(memorial museums)の開設・拡充の動きが強まっているとし、「(博物館などの形で)すでに21世紀初頭(の10数年)で開設されたものは、20世紀全体を通じて開設されたものより、数が多い」と書いている。さらに続いてこれは、「ダークイベントに対する大衆の良心(mass conscience)の一部となり、かくて社会としてそうしたものを記憶し、そうしたことが二度と起こらないよう努める槓桿になる」(Dunkley, 2017, p.109)と力説している。本稿筆者としても、総括的には、本来的にはここに、ナチスKZ跡ツーリズムを含めて、ダークツーリズムの本義はあると考える。

Ⅷ. おわりに

以上において、ナチスKZ跡ツーリズムに関説しつつ、ダー

クトゥリズムの諸論調を考察し、折に触れて本稿筆者の見解を開陳してきた。本稿で前提にしている、本稿まえがきで提起した3つの問題領域のうち、少なくともここで本稿筆者として改めて答えておきたいものに、ダークツリズムは普遍的なものか、特定のツリズム形態かという問題がある。この点について、本稿筆者としては、前者の普遍性論に賛同するものであり、本稿ではその時間的、空間的、社会的な展開について論じてきたが、なかんずく近年における地球環境問題をもダークツリズムとしてとらえようとするのは、卓見と考える。ただし、こうした地球環境問題を含めて、ダークツリズム性を受け止める仕方は、それぞれの個人により異なり、一樣のものではないことは、これを認めねばならないと考える。

この点について、例えばアシュワース／タンブリッジ (Ashworth & Tunbridge, 2017) も、直接的にはナチス KZ 跡ツリズムについてであるが、「ツーリストがこうしたサイトを訪れる動機は、様々である。個人的な強い信念 (conviction) に基づくものもあれば、規格的なツアーの一環というものもある。絶対に観ておかなければならない所という人もあるし、単に歴史的遺跡として見学するだけという漠然たる希望を持って来る人もある。また、学校行事等で集团的に訪れるだけという場合もあるであろう。しかし、そのいずれにしろ、こうしたサイトのツーリストは、そのサイトで眠っている犠牲者のことを強く思い、悲しみや悲痛の念、あるいは怒りの心を持って、人間のなしたことに對して、自ら有罪の念を抱いたりして恥じたり、自責の念を持ったりすることになる。少なくとも、そうした残虐行為が何故行われたかに関心を持つようになる」 (Ashworth & Tunbridge, 2017, p.80) と書いている。

KZ 跡ツリズム等のダークツリズムについていえば、本稿で既述のように、こうしたツリズムへの参加により、たとえ最初は好奇心を持つだけであっても、そうした残虐的非人間的な行為が二度と行われなことを望む精神が、それぞれの形で醸成されることが肝要と考える。これが、“歴史から学ぶ”ことの真の意味と考えられるが、そうしたことも“ダークツリズムの普遍性”の考えによって強化されるものと思料される。

もっとも以上は、基本的には、規範論的なものである。ダークツリズム論における二面性の展開は、本稿の直接的課題とはしていないものであるが、本稿の終りにあたり、一言だけいえば、本稿筆者としては、拙別稿 (大橋, 2021) で論じているように、なかんずく現在の社会では、少なくとも社会科学に求められるものは、規範論的なものとする。単なる事実の指摘は、今や機械によりなされる。人間のなすべきことは、正確な理論に基づく判断、行くべき道の指示である。ナチス KZ 跡ツリズムのあり方を思うとき、これを強く感じる。

【参考文献】

Ashworth, G.J. and Isaac, R.K. (2015), Have we illuminated the dark? Shifting perspectives on dark tourism, *Tourism Recreation Research*, vol.40, pp.316-325.

- Ashworth, G.J. and Tunbridge, J. E. (2017), Death camp tourism: Interpretation and management, in: Hooper, G. and Lennon, J.J. (eds.), *Dark Tourism: Practice and Interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 69-82.
- Bartel, W. (1974), Zum geleit, in: Institut für Denkmalpflege in der DDR, *Gedenkstätten*, Leipzig: Urania-Verlag, S.9-11.
- Beech, J. (2000), The enigma of holocaust sited as tourism attractions: The case of Buchenwald, *Managing Leisure*, vol.5, pp.29-41.
- Bell, D. (2003), Mythscapes: memory, mythology and national identity, *British Journal of Sociology*, vol.54, pp.63-81.
- Biran, A. and Poria, Y. (2012), Reconceptualizing dark tourism, in: Sharpley R. and Stone, P. (eds.), *The Contemporary Tourist Experience: Concept and Consequences*, London: Routledge, pp.59-70.
- Carr, G. (2017), A culturally constructed darkness: Dark legacies and dark heritage in the Channel Islands, in: Hooper, G. and Lennon, J.J. (eds.), *Dark Tourism: Practice and Interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 96-107.
- Distel, B. et al. (eds.) (2005), *The Dachau Concentration Camp 1933-1945*, 4th ed., München: Lipp Verlagsgesellschaft.
- Dunkley, R. (2017), A light in dark places: Analysing the impact of dark tourism experiences on everyday life, in: Hooper, G. and Lennon, J. J. (eds.), *Dark Tourism: Practice and Interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 108-120.
- 遠藤英樹 (2019) 「他者に寄り添い共生するゲームとしての『ダークツリズム』」:『ダークツリズム』から『ポリオフォニック・ツリズム』へ」『立命館大学人文科学研究紀要』121号、5-32頁
- Foley, M. and Lennon, J.J. (1996a), Heart of darkness, *International Journal of Heritage Studies*, vol.2, pp.195-197.
- (1996b), JFK and dark tourism: A fascination with assassination, *International Journal of Heritage Studies*, vol.2, pp.198-211.
- Hartman, R. (2013), Dark tourism, thanatourism and dissonance in heritage tourism management: New directions in contemporary tourism research, *Journal of Heritage Tourism*, vol.9, pp.166-182.
- Hodgkinson, S. and Urquhart, D. (2017), Prison tourism: exploring the spectacle of punishment in the UK, in: Hooper, G. and Lennon, J.J. (eds.), *Dark Tourism: Practice and Interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 40-54.
- Hooper, G. and Lennon, J.J. (eds.) (2017), *Dark Tourism: Practice and Interpretation*, Abingdon: Routledge.
- Hooper, G. (2017), Introduction, in: Hooper, G. and Lennon, J.J. (eds.), *Dark Tourism: Practice and Interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 1-11.
- Institut für Denkmalpflege in der DDR (1974), *Gedenkstätten*, Leipzig: Urania-Verlag.
- Lennon, J.J. and Foley, M. (2000), *Dark Tourism: The Attraction of Death and Disaster*, London: Cengage.
- Lennon, J.J. and Weber, D. (2017), Marketing Dachau: The long shadow, in: Hooper, G. and Lennon, J.J. (eds.), *Dark Tourism: Practice and Interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 26-39.
- Light, D. (2017), The undead and dark tourism: Dracula tourism in Romania, in: Hooper, G. and Lennon, J.J. (eds.), *Dark Tourism: Practice and Interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 121-133.
- Mannes, J. (2011), Visitor numbers of Dachau Painting Gallery, District Museum and New Gallery 2010, Email Personal Communication.
- Rojek, C. (1993), *Ways of Escape*, Basingstoke: Macmillan.
- Seaton, A.V. (1996), Guided by the dark: From thanatopsis to thanatourism, *International Journal of Heritage Studies*, vol.2, pp.234-244.
- Sharpley, R. (2009), Shedding light on dark tourism: An introduction, in:

- Sharpley R. and Stone, P. (eds.), *The Dark Side of Tourism: The Theory and Practice of Dark Tourism*, Bristol: Channel View.
- Sharpley R. and Friedrich, M. (2017), Genocide tourism in Rwanda: Contesting the concept of the “dark tourist”, in: Hooper, G. and Lennon, J. J. (eds.), *Dark Tourism: Practice and Interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 134-146.
- Sharpley R. and Stone, P. (eds.) (2009), *The Dark Side of Tourism: The Theory and Practice of Dark Tourism*, Bristol: Channel View.
- Stone, P. (2006), A dark tourism spectrum: Towards a typology of death and macabre related tourist sites, attractions and exhibitions, *Tourism: An Interdisciplinary International Journal*, vol. 54, p. 146.
- Tunbridge, J. E. and Ashworth, G. J. (1996), *Dissonant Heritage: The Management of the Past as a Resource in Conflict*, Chichester: Wiley.
- (2017), Is all tourism dark? in: Hooper, G. and Lennon, J. J. (eds.), *Dark Tourism: Practice and Interpretation*, Abingdon: Routledge, pp. 12-25.
- 大橋昭一 (2010) 『観光の思想と理論』 文真堂
- (2021) 「企業の社会的責任からサステナブル責任へ—企業の社会的責任の進展を希求して—」『和歌山大学・観光学』 24 号, 9-20 頁

受理日 2021 年 12 月 2 日